

(注) 解答はすべて解答用紙の指定された場所に記入しなさい。

一 次の設問に答えなさい。

問一 提示されている語句の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の内から一つずつ選び、番号で答えなさい。

(1) 秀抜

- ① 良いものを選んでぬき出すこと
- ② さわめて風変わりで、人の意表をつくこと
- ③ 着想がすぐれていること
- ④ 非常にすぐれた学問的才能があること
- ⑤ 他よりぬきんでてすぐれていること

(2) 遵奉

- ① あるものをよりどころにしてそれに従うこと
- ② さからわず、素直に従うこと
- ③ 前例に従ってそのとおりに行うこと
- ④ 他人に召し使われて勤めること
- ⑤ 道徳や法律などに従い、それを守ること

(3) アナロジー

- ① ある事例と他の事例の似ているところを推しはかること
- ② 企業が営利を得ることを最優先とする姿勢のこと
- ③ 自然環境保護について考えたり、行動したりすること
- ④ 社会における支配的な立場にあること
- ⑤ データを連続的に変化する物理量で表すこと

(4) パラドックス

- ① 同じ対象に二つの矛盾する感情や価値を持っているさま
- ② 帰属意識や自尊心によって形成される、自分が自分であることの証
- ③ 真理に反するように見えて、実は真理である説
- ④ 文化等において慣れ親しまれた規定や約束事
- ⑤ 歴史的・社会的立場に基づいて形成される考え方・思想の傾向

問二 提示されている意味を表す語句として最も適切なものを、次の①～⑤の内から一つずつ選び、番号で答えなさい。

(1) 意識に浮かび上がるイメージ

- ① 表現
- ② 表出
- ③ 表象
- ④ 表白
- ⑤ 表明

(2) 特定の時点において別々の対象をとらえるさま

- ① 一時的
- ② 共時的
- ③ 継時的
- ④ 通時的
- ⑤ 等時的

(3) 一つの時代における定型的なものの方

- ① アウフヘーベン
- ② エゴイズム
- ③ ジレンマ
- ④ パラダイム
- ⑤ モラトリアム

問三 提示されている語句の用例として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

(1) 機微

- ① 親の機微を損ねる
- ② 海外情勢の機微をとらえる
- ③ 先生の動作は常に機微である
- ④ 先輩は機微に富んだ人である
- ⑤ 調査協力者の機微を守る

(2) 他山の石

- ① 先生の持ち物は他山の石ばかりだ
- ② 尊敬できる先輩を他山の石にする
- ③ 人の悪行を他山の石にする
- ④ 友人たちと比べて自分は他山の石である
- ⑤ 家族との楽しかった旅行話は他山の石である

(3) コンテキスト

- ① 優れた映画を選ぶためにコンテキストを開催する
- ② あいまいな内容からコンテキストを発見する
- ③ 画像のコンテキストを調整する
- ④ 学級内で病気がコンテキストする
- ⑤ 機械の動作をコンテキストする

二 次の文章を読んで設問に答えなさい。

A 「自分を探す」というのは、奇妙な言葉だ。自分の存在は、自分にとって最も明らかなはずである。自分が考えていることは、他の誰が考えていることよりも感知しやすい。自分が好きなもの、自分がしたいこと、自分が得意なこと、自分が苦手なこと、自分の将来はどうなるのか、そういうことは、誰よりも自分が一番知っているはずである。それなのに、わざわざ海外旅行までしなければ、自分を探せない人がいるのだから、どうにもわからない。目的と手法がちゃらんぼらんぼらんな感じがして、非常に不思議だ。

ようするに、じっくりと考える時間が欲しい、というだけのことかもしれない（地球上のどこでも、考えることはできるが）。考えるのは、もちろん自分である。誰かが代わりに考えてくれるわけでもない。また、他者の生き方を見ても、それを自分に応用できるなんて保障はまったくくない。自分は何十年もかかって今の自分になった。同様に他者にもその人の履歴がある。条件が違いすぎる。それくらい、大人ならば理解しているはずだ。海外の田舎でどんな人に会うか知らないが、自分が求めている生き方がそこで見つかる、と信じられる想像能力は、それだけで凄い。そういう能力のある人は、たぶんどこでもいつでも自分を見つけれらるだろう。

簡単にいえば、自分が何を欲しがっているのかわからない、という状態かもしれない。目の前にショーケースがあつて、そこに商品が並んでいれば、その中から一番欲しいものを指さすことはできる。子供のときから、そうやって「欲しいもの」を決めてきた。選べば、それを買ってもらえるから、ずっとそれで満足してきたのだ。ところが、自分の生き方というのは、どのショーケースにも陳列されていない。似たようなものは多々あるけれど、それが本当に自分にぴったりマッチするものなのか、今一つ疑わしい。つまり、<sup>B</sup>ショーケースの商品を求めるように、他者の生き方を観察し、誰かの真似をしようとする、必ず無理が生じる。

あの人は楽しそうだ、あの人のしていることを自分もしてみよう、と考える。好きな人がやっていることを自分も試してみよう。こうして何度か信じて、実際に少しか試してみたものの、どうもしっくりこない。もしかして、自分には合わない対象だったのではないか。それとも、自分にはなにか欠陥があるのだろうか。そんな試行錯誤を繰り返しているうちに、少し体調が悪くなったり、疲れてしまったりして、もうなにかも嫌になる。なにもしたくなくなってしまう。このさき、どうしたら良いのかわからなくなってしまう。結局、そういう人が、「自分を探したい人」になるのではないか。

少なくとも、僕が相談を受けた若者は、大まかに括れば例外なくそういう人たちだった。他者に影響されて、それを取り入れてみたけれど、結局は続かなかつた。なにをやっても楽しくなくなってしまう。いったいどこに問題があるのか。みんなは楽しそうなのに、自分だけが楽しめないのは、自分に問題があるからで、これはなにかの病気かもしれない。自分は駄目な人間なのか。こんなことで、このさき生きていけるだろうか？

漠然とした悩みではあるけれど、こんな問題について、思いつくままに書いてみたいと思う。僕が思いついたことだけしか書かない。なにかを調べたり、人から聞いたことも書かない。これは、そういう性質の問題で、個人的な「考え方」以外に答はないように思うからだ。

つまり、「万能薬」はない。たぶん、それくらいはわかっていると思う。どんなに <sup>A</sup> が認められている方法であつても、対象が人間の場合には、効く場合もあれば効かない場合もある。情報を広く集めて <sup>B</sup> として解説し、こういう全体傾向があると示しても、ある一人（つまりこれを読んでいる貴方<sup>あなた</sup>）に効き目がなければ価値はない。

ならば何故書くのか、といえば、これも大勢の若者に接して僕が感じたことの一つだけれど、<sup>C</sup> 多くの人は答を求めているのではない、という事実だ。そんなに簡単に解決するものではない、と誰もがうすうす感じているのである。非常に賢明というか、優秀な感覚だと思う（むしろ、そういう優れた感覚の持ち主が悩むのだが）。そういう人は、大きく期待はしていないものの、少しでもヒントになるようなもの、あるいは、自分に勢いをつけてくれる言葉を見つけようとしている。自覚はないか

もしれないが、Cにそう見える。

たとえば、ぼんと背中を叩かれるだけで、気持ちが楽になるような一瞬がある。叩かれて振り返ると、笑っているのか、怒っているのか、よくわからない顔がそこにあるだけだ。大事なことは、背中を叩いたのがロボットではない、ということである。つまり、自分ではない「人間」が、自分を叩いてくれたのだ。それだけのことで、自殺を思いとどまる人もいるだろう。なんとなく、そのとき、その日は、気持ちが安らぐかもしれない。すると、ふと自分の中から湧き上がるものを感じて、もう一日だけでも、がんばってみようと思ったりできる。

結局のところ、「あ」というのは、背中を誰かに叩いてもらいたい、という気持ちから生じるものであって、その気持ち自体が最も大切なのではないか。その気持ちがあれば、なにかを求めている前向きな姿勢になるし、この求めること自体が、きっと生きていくために必要なものを生産するだろう、と僕は思う。

(森博嗣『自分探しと楽しさについて』集英社、2011年より)

問一 傍線部 A で筆者は「自分を探す」と述べている。それはどのような状態か、三〇字以内で述べなさい。

問二 傍線部 B で筆者は「ショーケースの商品を求めるように、他者の生き方を観察し、誰かの真似をしようとすると、必ず無理が生じる」と述べている。その理由として最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のことは誰よりも自分が一番よく知っているはずであるから。
- イ 自分を探すための目的と手法がちゃんぽらんで対応していないから。
- ウ 自分は何十年もかかって今の自分になったのであり、他者とは条件が違いすぎるから。
- エ 試行錯誤を繰り返すうちに、体調が悪くなったり、疲れてしまったりしてなにもかも嫌になってしまうから。
- オ 自分だけが楽しめないのは、自分には問題があり、なにかの病気かもしれないから。

問三 A B C に入る最も適切な語句を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- |   |       |       |       |       |       |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">A</span> | ア 効率性 | イ 有効性 | ウ 偶然性 | エ 客観性 | オ 普遍性 |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">B</span> | ア 理想論 | イ 具体論 | ウ 正論  | エ 一般論 | オ 異論  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">C</span> | ア 常識的 | イ 具体的 | ウ 客観的 | エ 抽象的 | オ 普遍的 |

問四 〔あ〕に入る最も適切な文章を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本を読んだり、人の経験を聞いたり、相談に乗ってもらったり、他者の生き方を観察する、
- イ 他者の生き方を観察して、試行錯誤しているうちに疲れてしまい、もうなにもかも嫌になる、
- ウ 海外旅行を計画し、普段の生活とはまったく違うことを体験して自分を探す、
- エ 簡単に諦めず、しっかりと自分と向き合い、もう一日だけでもがんばってみようと思う、
- オ 自分の悩みを文章にまとめたり、考え直したり、分析したりして解決の糸口を探す、

問五 傍線部Cで筆者は「多くの人は答を求めているのではない」と述べている。その代わりに多くの人が求めているものは何か、四〇字以内で述べなさい。

三 次の文章を読んで設問に答えなさい。

人間はまことに複雑に「組み立てられて」いる。その「組み立て」がどのようなものであるかについての考え方は、昔と今とは、大きくちがう。昔と今とは、という言い方は、まことにあいまいな、乱暴とも言える言い方である。考え方は、徐々に、連続的に変化してきた。連続性の中に、いくつかの節目を見ることはできるが、基本的には連続的な変化であった。しかし、だからこそ、時代を一挙に隔てて、今と昔とを、というふうに比較してみると、ちがいがきわだって見えてくる。そして、このような、つまりはコントラストを強調する仕方できわだたせてみることによって、人間がどのように「組み立てられて」いるかについての今日の考え方の特色がとらえやすくなる。

人間の「組み立て」の複雑さについては、さしあたり三つの方向から考えることができる。ひとつは、身体という方向から、もうひとつは、心という方向から、そして、身体と心との関係という方向から、である。

人間の身体が複雑に組み立てられているということを、言われるまでもなく、われわれはよく知っている。いや、実のところ、「われわれはよく知っている」というのは **A** である。ほんとうによく知っている人間は、医学者を中心として、要するに医学や保健関係のひとたちであって、それ以外のひとたちは、そういうことがらに特に関心があって勉強したひととはちろん別にして、人間の身体の組み立ての複雑さについてそれほど具体的に詳しくは知らないのがむしろふつうである。にもかかわらず、もの見方考え方としては、今日の人間は一般に、人間の身体は複雑に組み立てられているという見方考え方をしている。

そして、人間の身体Aの組み立てについての見方考え方の基本には、専門家と一般のひとびとに共通して、たいてい誰もがすでに初等教育の時代に理科室で見た人体の骨格見本や、教科書に載っていた解剖図や、ホルマリン漬けにされた動物臓器、などのイメージがある。専門家と一般のひとびととのちがいは、その後、そうしたものとしての人体を実際に自分の眼で見、

また触れたかどうか、そして、そうした人体についてより具体的に、より詳しく、より正確に知っているかどうか、のちがいはある。基本にある見方考え方に大きな、あるいは根本的なちがいはない。そして、基本にある見方考え方は、今と昔とでは大きくちがうのである。

人体についての今日の見方考え方の基本にあるのは、端的に言えば、要するに医科学的な見方考え方、より **B** に言えば、解剖学的な見方考え方、である。このことから言えば、今日の見方考え方は、ヒッポクラテス（紀元前四六〇年頃～三七五年頃）に代表される古代ギリシアの医学とガレヌス（一二九年～一九九年）に代表される古代ローマの解剖学の見方考え方の延長線上にある。

解剖というのは、もつとも単純な意味では、生物体の外皮を切り開いて、内部を見るということである。単にそういうレヴェルのことであれば、解剖は歴史的には相当古くから見られる。時代区分は文化圏による進展速度や事情のちがいもあって一律には扱えないが、たとえば、古代インカにおいて外科手術的なものがあつたとも言われており、そうだとすれば、そこにはすでに解剖ないし解剖的なものが多少なりともあつたはずである。

しかし、人間の身体を開けて、その内部構造をみていくという仕方では人間という存在を憐れに見るといえることが **B** 知的に重要なこととして認識されておこなわれるということは、なんらかの実際上の必要性にせまられて人体の一部の外皮を切り開くということとは、もの見方考え方としては、小さからぬちがいがある。そして、今日のもの見方考え方は前者の方であり、こうしたもの見方考え方は、単純化して区分すれば、東洋ではなく西洋の見方考え方である。西洋は、人間の身体を開けて、その内部構造をみていくということを、単なる「術」ではなく知として重要な意味を持つ営み、すなわち「学」として、高い位置に置いた。医学は、西洋では、早くから、数学や天文学や修辞学などと並ぶ学問のひとつとされてきた。

**C**、古代ギリシア、ローマにすでに始まっていた **C** 西洋医学、すなわちそのときそのときに病人に対処する「治療」に主眼を置くのではなく、人間一般についてのある方向からの知的探究と認識の学としての医学、のもの見方考え方がいわばすんなりと成長して、人体についての現代医科学的なもの見方考え方に至っているというわけでもない。途上には、これと抵触するもの見方考え方も強い力を持って立ちはだかつてきた。それはとくにキリスト教のまさに宗教的なもの見方考え方であった。

ここで「**D**心」という問題がきわめて重要な問題として浮かび上がってくる。問題は、古くから、「心」はどこにあるのか、という問題の立て方で、論じられてきた。

問題が、そういう問題の立て方で論じられてきたというのは、考えてみれば、自然なことであり、宗教のものの見方考え方がどうであれ、それ以前に、自然に出てなんら不思議はない問題設定である。というのも、死体もまた身体であるが、生きている身体と死体とのあいだには、誰の眼にも明らかな差があり、この歴然たる差の説明として、もし、生きている身体と死体は身体そのものとして見れば基本的に変わることはないのであるから、生きている身体にはその「生」の「生」たるゆえんのものが見えないものとして「宿って」いる、という説明は、たいていのひとが考えそうな、したがって、たいていのひとの同感する、説明であろうからである。

（増成隆士『現代の人間観と世界観』東海大学出版会、1997年より）

問一 **A** **B** **C** に入る最も適切な語句をア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- |          |        |         |          |          |          |
|----------|--------|---------|----------|----------|----------|
| <b>A</b> | ア 言い過ぎ | イ 言い得て妙 | ウ 言わずもがな | エ 言うに及ばず | オ 言わんばかり |
| <b>B</b> | ア 全体的  | イ 概括的   | ウ 現代的    | エ 限定的    | オ 普遍的    |
| <b>C</b> | ア しかし  | イ したがって | ウ そこで    | エ そのうえ   | オ すなわち   |

問二 傍線部 A の「人間の身体の組み立てについての見方考え方」について最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 理科室の人体の骨格見本では身体の組み立てを理解できない。
- イ 専門家と一般のひとびとでは身体の見方考え方に基本的なちがいはある。
- ウ 現在と過去では身体の見方考え方に基本的なちがいはある。
- エ 解剖学的な身体の見方考え方は古代ローマから古代インカに伝わった。
- オ 時代区分によっては外科手術的なものがあったからといって解剖的なものがあったとは限らない。

問三 傍線部 B の「知的に重要なこととして認識されておこなわれるということ」について最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 身体を治療したことがその内部構造を「学」として探求する動機になった。
- イ 身体を「術」として探求したことが身体に関する現在の見方考え方に自然につながった。
- ウ 医学は数学や天文学と並ぶ学問のひとつであったが、やがて治療に主眼を置くようになった。
- エ 知的探求としての医学は現代医科学的なもの見方考え方に至るものではない。
- オ 宗教的なもの見方考え方が人間一般に関する知的探求を促した。

問四 傍線部 C の「西洋医学」はどのように人間一般の医学になったのか、四〇字以内で述べなさい。

問五 傍線部 D の「心」という問題はどのような考えから提起されたのか、四〇字以内で述べなさい。